



龍の背に乗って

眞谷 洪

開幕から52試合、本紙カメラマンに撮り続けてもらったシーンがある。ベンチにマウンドにできる輪がほどけ、それぞれの守備位置に散る。そのとき京田を追っていった。

僕の不思議な注文に「なんでこんな写真を」「いつまで撮れは」「と思っただろうが、彼らは文句も言わずに撮り、マウンドに野手が集まった回数分だけ、データが蓄積されていった。

何度か書こうかと思ったが、踏ん切りがつかなかった。やはり京田だけではダメなのだ。53試合目の荒木との



8回裏無死。マウンドに集まった後、後ずさりするように守備位置に戻る（左から）京田、荒木ら（中畑大樹撮影）

京田に継がれた荒木イズム

初コンレ。8回、鈴木博が近藤に2ランを浴びた直後、朝倉投手コーチが間を取った。輪がほどけ、2人をあつてマウンドを向いたまま後ずさって守備位置へと戻っていった。

普通は前を見て歩く。誰だっただろう。僕が知る限り、後退するのは2人だけ。もちろん理由がある。

「僕は2軍で徹さんに教わったんです。『荒木、どんなときも隙を見せず、相手の隙を探せ』ってね」。下積み時代に仁村徹2軍監督からたたき込まれ、20年守り続けた教え。それを昨年、京田に伝え、京田は受け継いでいる。

輪ができるのは、自分たちのピンチで相手のチャンス。何か策を任せてくる千兆はないか、ベンチに動きはないか。鳥の流れを食い止めるために観察する。においを嗅ぐ。しかし、タラウノ下を向けては何もわからない……。といても残りある情報を得られることなど、1000回、いや10000回に1度あればいい方だろう。でなければ、他の選手もやっている。だけど、999回を無駄にできた人だけが、1回の成功を得られる。

「荒木さんに教えられてから、僕はずっと続けてきました。何かを感じられたら。そう思っただけです。これだけじゃなく、荒木さんに教わることはまだまだあるんです」

荒木に只込まれた京田も、いつかまた後輩に伝える。それが強いチームには必ずある伝説だ。